

ソシュールの「ホイットニー追悼論文覚え書き」と第3回一般言語学講義 ——言語記号の示差性と恣意性をめぐって——

三 好 楠二郎

梗概

本稿は、ソシュールの基本思想について再考を試みるものである。現代思想におけるソシュールの影響を一瞥した後、1894年頃までのソシュールの半生を概観し、当時、「謎の沈黙」に陥ったソシュールが、「ホイットニー追悼論文覚え書き」に記した言語記号の示差性と恣意性に関する思想を指摘する。その上で、その思想が、1910年に始まる彼の第3回の一般言語学講義の概要をなしていることを論じ、この脈絡から通時言語学と共時言語学、シーニュとシニフィアン・シニフィエ、およびランゲージュとラング・パロールの概念を再考する。

1 現代思想におけるソシュールの影響

1857年スイスに誕生した「現代言語学の父」と称されるフェルディナン＝モンジャン・ド・ソシュール (Ferdinand-Mongin de Saussure) の言語思想が、20世紀に於いて、多岐に渡る学問分野で本質的な影響をもたらした事実は、広く知られている。その模様は、ロイ・ハリス (Roy Harris) による *Saussure and His Interpreters* (2003) で (誤解による影響も含めて) 詳説されているが、若干の例を挙げるだけでも、心理学の分野ではジャック・ラカン (Jaques Lacan) やジャン・ピアジェ (Jean Piaget) 等が、文化人類学の分野ではクロー

ド・レヴィ＝ストロース (Claude Levi-Strauss) 等が、哲学の分野ではエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) やモーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty) 等が、文学の分野ではジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) 等が、それぞれに、理論構築の本質次元にあってソシュールの影響を被っている。記号学の巨匠とされるミシェル・フーコー (Michel Foucault) 等に至っては、ソシュールの言語理論を自明の前提として理論を展開しているとされている。正に、ソシュールの言語思想は20世紀の人間研究で出色の趣きを呈しており、その様相は、おそらくは、21世紀を通して継続していくであろう。

そうした言語思想のことごとくは、ソシュールが1907年から1911年の4年間にジュネーヴ大学で講じた3回に渡る「一般言語学講義」(以下、「講義」)で開陳されたものである。現代流に言えば、これは選択科目であり、それを受講した学生の人数は、第1回目(1907年)が6名、第2回目(1908-1909年)が11名、第3回目(1910-1911年)が12名と極めて少なく、延べ人数にしても30名に満たない。しかも、ソシュールは、その講義の内容を、微塵たりとも、著書・論文の類いで公表していない。(ちなみに、ソシュールは、生涯に渡って、ただの一冊も著書を著していない。)1913年にソシュールが55歳で世を去った後に、その講義の記録としてアルベール・セシュエ (Albert Sechehaye) とシャルル・バイイ (Charles Bally) が1916年に刊行した『一般言語学講義』(*Cours de linguistique générale*)——彼らはソシュールの講義を受けておらず、その著書がどの程度ソシュールの真意を反映しているかは別として——にしても、300ページ余りの、いわば小型本の域を出るものではない。このような事情を考慮に入れると、ソシュールの言語思想の広範にして甚大な影響は、他に類例を見ない驚嘆に価する事実と言えるであろう。参考までに、2006年にキャロル・サンダース (Carol Sanders) とマシュー・ピアス (Matthew Pires) が刊行した *Writings in General Linguistics* (1996年にソシュール家の納屋で発見されたソシュールの手稿を含む2002年にフランスで刊行されたシモン・ブーケ (Simon Bouquet) とルドルフ・エングラール (Rudolf Engler) の手によって編纂された *Écrits de linguistique générale* の英訳) では、巻末に、およそ1,500点に

及んで、ソシュールの言語思想に関する研究書・学术论文が紹介されている。

2 ソシュールの思想形成における問題点

以上を前置きとして、ソシュールが「講義」で講じた言語思想を、逐一の解説を割愛して列挙すると、およそ次のようになろう——言語学に関する通時言語学 (*linguistique diachronique*) と共時言語学 (*linguistique synchronique*) の分割 (一般に、ソシュールは主として後者に携わったとされる)、言語のランゲージュ (*langage*) とラング (*langue*) とパロール (*parole*) への区分 (一般に、ソシュールは主としてラングを扱ったとされる)、言語記号シーニュ (*signe*) に関するシニフィアン (*signifiant*) とシニフィエ (*signifié*) の区分 (もともと、ソシュールは言語単位の画定に懐疑的である)、言語記号の示差性 (*différences de signes*) と恣意性 (*arbitraire du signe*)、等々。

ここで留意すべきは、ソシュールが、それらの言語思想を、当初から周到な熟考に基づく準備をして開陳したのではない、という事実である。なかならず、ソシュールの言語思想で幅広く知られているであろう言語記号に関するシニフィアンとシニフィエについて、ソシュールは、第1回目・第2回目の講義では、何ら言及することなく、受講者のひとりエミール・コンスタンタン (*Emile Constantin*) の講義ノートによれば、生涯最終の第3回目の「講義」——これは1910年10月28日から翌1911年7月4日にかけて行なわれたのであるが——の後半、1911年の5月19日に初めて開示されたのであった。諸資料に当たれば、その頃以前には、これらシニフィアンとシニフィエの用語について、ソシュール自身の脳裏にも浮かんでいなかったことは、ほぼ明瞭である。

そこで、問題が生じる。およそ、専門用語を伴う学術的思想形成には、2通りの在り方があろう。ひとつは、次から次へと追加的に増幅する思想、言ってみれば、思想の肥大化に伴う専門用語の形成である。あとひとつは、当初の思想を明瞭にするために、やむなく専門用語が用いられる場合である。後者の場合、思想の肥大化はなく、明瞭にされるべき思想は、ただひとつである。ソ

シュールの場合、これら2者のいずれであったのか。もしも、結論の先取りが許されるのであれば、答えは後者である。その広範かつ甚大な影響にかかわらず、また数々の言語理論にもかかわらず、ソシュールが「講義」で明瞭にしたいと望んだ事柄は、彼が当初から抱いていた、ただひとつの言語思想であった。

3 「謎の沈黙」と「講義」の開始

ソシュールが「当初から抱いていた」言語思想と述べた。その「当初」とは、第1回の「講義」が開始された1907年ではない。関連する文献に基づけば、その年を十数年さかのぼる1894年である。その間の事情を知るために、ソシュール研究の古典的な大御所のひとりとされているトゥリオ・デ・マウロ (Tullio de Mauro) 著—山内貴美夫訳による『「ソシュール—一般言語学講義」校注』(1976)等を参照して、関連するソシュールの事跡を略述しておこう。

1876年にスイスを離れてドイツに留学し、ライプツィヒ大学とベルリン大学で、博士論文の執筆等を通して、比較言語学の分野（一般言語学の分野ではない）で卓抜した功績を挙げたソシュールは、やがて、1880年にフランスに転居した。その2年後にはパリ言語学会の副幹事に就任し、学会誌の編集や研究調査に携わる等、旺盛な活動を展開する。その目覚ましい活動によって、パリに滞在して10年を経た1890年には、わずか33歳でコレージュ・ド・フランスの教授に推挙された。しかし、この輝かしい栄誉に預かるためには、スイス国籍を棄ててフランス国籍を取得せねばならず、これは、ソシュールの愛国心が許すところではなかった。同時期、スイスにおける彼の出身大学であったジュネーヴ大学から彼を教授として迎えたいという誘いがあり、ソシュールはこれを受諾。翌1891年にはジュネーヴ大学の教壇に立つことになる（1896年まで非常勤教授、以後、サンスクリットと印欧諸言語の正教授）。パリを離れるに際して、ソシュールは、学問上の大きな功績によってレジオン・ドヌール勲章を授与されている。

ところが、郷里に戻ったソシュールは、結婚し2児をもうけた後、1894年頃から、自らを学术界との交流から断つようになる。その行動は、残りの生涯

すべてに渡って続くのであるが、多くの人々は、これを「謎の沈黙」と呼んでいる。この始まりは、ソシュールがパリにおける旺盛かつ目覚ましい学術活動ゆえにコレージュ・ド・フランスの教授に推挙されてから4年の後に過ぎない。一体、彼の身に、または思想に、どのような変化が生じたのであろうか。前者「彼の身」について、デ・マウロー山内（1976）の伝記資料は、ソシュールの慕わしくも平穏な様相を伝えている。ジュネーヴ大学の図書館主任でもあったソシュールは、日々、図書館の書籍購入と分類を行ない、講義では、特にサンスクリットの教授に際して、毎回、手ずから学生のために、練習問題を準備して（ガリ版刷りであろう）、それを受講生に行なわせ、添削していた。ソシュールの講義については、学問的な誠実さと学生への誠実さが見事に融合・調和した大学教授の理想の姿を見る思いがする。以下、2点ほど受講生の証言を引用しておきたい。

ある日——ごく稀なことだったが—— [ソシュールは] 私は長いページのなかで過ちを一つしかしなかつたと私に言った後で、淋しげに、ただし零点をつけた、と告げた。[サンスクリットの] 間違っではいけないところで、私は短い *a* を長い *a* と混同していたからだった […。]。（デ・マウロー山内：1976, 319）

この師は […。] 私たちのまったく知らないでいた、知的節度を要求した。ある日サンスクリットのちょっとした宿題を返してくれたときのことを思い出す […。]。つぎのような書き込みがあった。「私 [ソシュール] は今からサンスクリットの『およそ』に対して貴方を保護下におかなくてはなりません」 […。]。（デ・マウロー山内：1976, 319）

ソシュールの学問と学生への厳しくも誠実な姿勢は、パリ在留時代でも同様であったと伝えられている。

一方、こうした「彼の身」に対して、「彼の思想」には、激しい変化が訪れ

ていた。それは、比較言語学という学問分野が始まって以来、営々と築かれてきた言語研究の手法に対する絶望的なまでの悲嘆であった。その様子は、ソシュールが1894年にパリ時代の教え子であったアントワヌ・メイエ (Antoine Meillet) に宛てた書簡の内容に示されている。その書簡に述べられた内容のいくつかを箇条書きにすると、次の通りである；

- (1) 今や、自分に興味を持てるのは、個別言語の民族誌的な側面となってしまった。[個別言語とそれに関連する文化史の関係であろう。]
- (2) 言語事象 [言語一般の事象であろう] について意味ある内容を書こうとすると、その不可能性に圧倒される。
- (3) 言語学 [比較言語学であろう] でなし得ることは、終局、かなりむなしきものである。
- (4) その関係から、旧来、言語学 [比較言語学であろう] で使用されている用語がいかに荒唐無稽であるかを指摘し、それらを改革する必要性が感じられてならないが、それには膨大な労力を払わねばならない。
- (5) 正直なところ、自分は言語一般に関わりたくない。
- (6) だが、個別言語の民族誌的な側面を探究している時も、「そもそも、言語とはどういう種類の対象であるか」を示す必要性が感じられてならず、そうした探究に没頭することができない。

この内容には、それまで予想もしなかった言語一般の本質に関わる真実の一端を垣間見たソシュールの、それまでに自ら卓抜した功績を成し遂げた比較言語学の分野における手法の一切に対する絶望の中、それでもなお膨大な労力を費やしても言語なるものの本質を開示せねばならない、という懊悩を読み取ることができよう。言わば、言語に「憑依」されたことに由来する「人間ソシュール」の呻吟と表現できようか。この懊悩・呻吟は、年を経るごとに強まる。デ・マウロー山内 (1976, 336) の伝記資料は、ソシュールによる次の発言を伝えている——「言語の土地に足を踏み入れるひとは誰でも、天地のあらゆる類同

から見捨てられると言われてもしかたがない」。

そうした救われようのない重苦しさが年を追って強まる中、ソシュールは、1906年に、ジュネーヴ大学から一般言語学の講義を担当するよう命じられる。その時のソシュールの心情について、日本でソシュール学を興隆せしめた丸山圭三郎は、『ソシュールの思想』（1981）で、膨大なソシュール関係の資料を整理したロバール・ゴデル（Robert Godel）の著述から、次の一節を肯定的に引用している：

この新しい仕事を命じられたことは、ソシュールを戦慄させた。彼は自らがその任でないと感じていただけではなく、再びその問題と格闘する気にはなれなかったからである。けれども彼は、自分の義務と信じてこれを引受けた。（丸山：1981，31）

20世紀の精神史に決定的な影響をもたらし、おそらくは21世紀を通して消えることはない遺産となるソシュールの「講義」は、このような懊悩と呻吟そして戦慄の只中で開始されたと見なされる。ソシュールは徹底して誠意の人であった。もしも、仮にも、彼に職務上の誠意・学問への誠意・受講生への誠意の内、ひとつでも欠けていたとすれば、我々は今なおソシュールを知らず、20世紀の精神史は、かなりの程度に及んで貧弱になっていたことであろう。

4 「ホイットニー追悼論文覚え書き」と「講義」の概要

以上、1894年に始まる懊悩から1906年における一般言語学の講義担当の受諾に至るソシュールの精神状況について、概略の記述を試みた。その上で、本稿第2章に於いて、筆者は、ソシュールが「講義」で明瞭にしたいと望んだ事柄が、彼が1894年から抱いていた、ただひとつの言語思想であった、と述べた。実は、その背景には、ソシュールが、まさに1894年の11月に執筆を試みながら最終的には完成を見なかったアメリカの言語学者ウィリアム・ホイットニー（William Whitney）のための追悼論文のための覚え書き「ホイットニー追悼論

文覚え書き」(以下、「覚え書き」)がある。(これは *Écrits* では“Notes pour un article sur Whitney”として pp. 203-222 に、その英訳 *Writings* では“Notes for an article on Whitney”として pp. 140-156 に収められている。)

ホイットニー——ソシュールの当時から現在に至るまで、比較言語学の巨匠と見なされている人物である。1894年に逝去したこの学者について、彼が創設したアメリカ文献学会 (American Philological Association) が、ドイツとフランスで比較言語学の分野で優れた功績を残していたソシュールに追悼論文の寄稿を求めたことは極めて自然であった。そして、ソシュールは、その要請に応えようとした。しかし、その時点で、ソシュールは既に比較言語学が取る言語研究の手法に絶望していたのであり、そのようなソシュールにとって、自らの心情に誠実であろうとすれば、比較言語学者としてのホイットニーを称え偲ぶ論文など書ける道理がなかった。(当時のソシュールはホイットニーに敬意を寄せていたが、それは「ホイットニーが比較言語学者でありながら言語の真実を求めていた」という理由であった。しかし、アメリカ文献学会のソシュールに対する要請は、比較言語学者としてのホイットニーを論じることであった。) 記録によれば、ソシュールは様々に思いをめぐらせながら、70枚に及んで目的の論文のための「覚え書き」を書いたとされているが、いま、*Écrits* に収められているその内容を総体的観点から見ると、言語学に関わりを持たない素人の目からしても、眼を覆いたくなるほど支離滅裂である。何よりも、微塵たりとも論旨が浮かび上がる可能性が絶無である。結局、「覚え書き」は論文へと発展することはなく(誰にせよ「発展し得ないの是一目瞭然」と断じて良い)、ソシュールはアメリカ文献学会に何らの応答もすることができなかった。そして、この一事がソシュールと学術界との断絶を深めたことは想像に難くない。

しかしながら、この無残なまでに支離滅裂な「覚え書き」の執筆も、言ってみれば、ソシュールが彼の一般言語学に関わる想念を「結晶化」する点から見ると、実に偉大な結果をもたらした。すなわち、「覚え書き」には、「言語の終局的法則」として、次の一節が見出されるのである：

[...] la loi tout à fait finale du langage est qu'il n'y a jamais rien qui puisse résider dans *un terme* [...], que *a* est impuissant à rien désigner sans le secours de *b*, celui-ci de même sans le secours de *a*: ou que tous deux ne valent donc que par leur réciproque différence, ou qu'aucun ne vaut, même par une partie quelconque de soi [...], autrement que par ce même plexus de différences éternellement négatives. (*Écrits*: 2002, 218)

(拙訳——言語の終局的法則は、単独の項には [...] 何も存在し得ない、ということである。*a* という項は *b* という項の助けなしには何物も指し示すことはできず、*b* という項も *a* という項の助けがなければ同様である。いずれも互いとの相違によってのみ効力を持つ。それ自体のみでは、すなわち、この常に否定的な相違という複合体によらなければ、何ら有効性を持たないのである [...]。)

この一節について、若干の補足を施すとすれば、仮に *a* という項を「ポジティヴ」(フランス語で *positif*)、*b* という項を「ネガティヴ」(フランス語で *négatif*) としてみよう。「ポジティヴ」という項は「ネガティヴ」という項を前提として成立している。その一方、「ネガティヴ」という語は「ポジティヴ」という語を前提として成立している。そして、両者いずれにも、それ固有の他方から独立した意味は持ち得ない。また、引用中「項」(*terme*) という用語について、これは、「単語」(フランス語で *mot*) なるものが、必ずしも、ひとつでひとつの概念を持つとは限らないという事実を考慮に入れておきたい。例えば、「虹」について、英語では *rainbow* という一語で表現される(複合語としても *rain + bow* で2語の合成)が、フランス語では *l'arc en ciel* という3語である(定冠詞 *le* を含めるとすれば *le + arc + en + ciel* の4語)。そしてまた、後に触れるが、ソシュールの言う項には、単語の変化語尾等も含まれるということも、意識しておきたい。

さて、ここで、明瞭に認識したい。ソシュールが言語の謎に憑依され始め精

神秘的な混沌の中で発せられた1894年におけるこの記述は、17年後の1911年7月4日に行なわれた第3回「講義」の最終日の後半で提示された当該講義総体の結論に関わる言辭と符合・一致しているのである。すなわち、その日の講義が記録されたコンスタンタンのノートには、ソシュールによる次のふたつの発言が明示されている——この引用中、後述する事柄との関係から、「覚え書き」の後にソシュールが創案したパロールに対するラングの用語が使用されている点に留意しておきたい（翻訳は、影浦峽・田中久美子訳『ソシュール—一般言語学講義——コンスタンタンのノート——』（2007）を用いる）：

[...] il n'y a dans la langue (c'est- à-dire dans un état de langue) que des différences. (Constantin: 2006, 288)

（訳—— […] 言語 [ここで“langue”はパロールに対するラングの意]（つまり言語 [ここで“langue”は通常の言語の意] の状態）には差異しかない […]）。（ソシュール—影浦・田中：2007, 176）

=====

Dans la langue, il n'y a que des différences sans termes positifs. (Constantin: 2006, 288)

（訳——言語 [ここで“langue”はパロールに対するラングの意] には実定的な項のない差異しかないのです。（ソシュール—影浦・田中：2007, 176）

この点、H. A. スリュサレヴァ（H. A. Slusareva—ロシアのソシュール学者）著—谷口勇訳『現代言語学とソシュール理論（改訂版）』（1989）が、その書の結論部分で、次のように、上で引用した「覚え書き」の一節の周辺を取り上げて、その内容を、ほとんどソシュールの言語思想全体の枢軸と見ていることは、興味深い：

ソシュールはその全注意を相対的特性に集中したし、そして用心深く、まったく重要な次の哲学的結論を引き出したのである——「われわれはあえて言う。言語活動のまったく究極的法則〔拙訳では「言語の終局的法則」〕は、そこではひとつの辞項〔拙訳では「単独の項」〕には何も存在し得ないということ〔拙訳では「何物も指し示すことはできず」〕（もろもろの言語的象徴は、それらが指し示すはずのものとはいかなる関係もない、ということの直接的帰結）（中略）や、それら〔中略〕の諸部分ですら、あくまでも消極的なもろもろの差異のこの網目構造そのものによらずに〔拙訳では「常に否定的な相違という複合体によらなければ」〕、それ自体では価値を持たないということになるのだ〔拙訳では「何ら有効性を持たないのである」〕、と」（EC, p. 264）。（スリュサレヴァー谷口：1989, 173）

スリュサレヴァー谷口も指摘した、第3回の「講義」の枢要部分と関わる「覚え書き」の一節は、実は、ソシュールの言語思想の核心を構成する言語記号の示差性（différences de signes）と呼ばれる概念に関係する。

ただし、多分は、残念なことに、スリュサレヴァー谷口は、自身が引用した一節が、「覚え書き」からのものであることに気付いていない。それは、出典について「（EC, p. 264）」と記されている点に窺われる。「EC」とは、スリュサレヴァー谷口の本（1989, 10）を参照すると、“EC F. DE SAUSSURE, *Cours de linguistique générale*. Edition critique par R. Engler. Wiesbaden, fasc. 1-2 (1967), fasc.3 (1968), [fasc. 4 (1974)]”と記されており、それが、エングラの手になる、バイイとセシュエの『一般言語学講義』を中心に諸資料が集積された一書であることが了解される。その一書で、関係する264ページを見ると、当該の「覚え書き」が、バイイとセシュエの『一般言語学講義』の一節の補足資料として扱われていることが分かる。そこには原資料の参照番号等が記されているものの、当該ページに限っては、それが「覚え書き」の一節であることを示す記述は、執筆年代を含め、何一つ見られない。或いは、スリュサレヴァー谷口には、

自らが「[ソシュールが] 用心深く引き出した、まったく重要な哲学的結論」(趣意)としている内容が、第1回目の「講義」の開始をも13年遡る文献の内容であるとは思ってもよらなかったのではなからうか。

以上、本章は、ここまで、言語記号の示差性という、1911年に行なわれた「講義」総体の最後最終の日を示された枢要な概念について、第1回目の「講義」すら開始される遙か以前の1894年、ソシュールが言語なるものに「憑依」されることによって始まった懊悩の当初に、「覚え書き」の執筆を通して、その核が形成されていたであろう様子を概観した。

そして、この言語記号の示差性という概念は、あとひとつの原理である言語記号の恣意性 (*arbitraire du signe*) と関係している。この言語記号の恣意性についても、既に「覚え書き」に明示されており、それは、次のようなふたつの文言で表現されている：

[...] si le symbole change, immédiatement après il y a un nouvel état, nécessitant une nouvelle application des lois universelles. (*Écrits*: 2002, 209)

(拙訳——もし表象が変化すれば、直ちに新しい状態が招来され、新たな普遍的法則の適応が要求される。)

=====

[...] laquelle [conscience] n'aperçoit perpétuellement que la différence *a/b*, que chacun de ces termes reste exposé [...] en ce qui le concerne de se modifier [...]. (*Écrits*: 2002, 219)

(拙訳——それ[意識]は常に *a/b* の相違のみを感知するのであり、これらの項は、いずれも変化にさらされている。)

これらの文言は、やはり、ソシュールが17年後に第3回目の「講義」の最終日に提示した次の発言に対応すると見なされる：

Le principe finalement auquel revient la chose est le principe fondamental de l'arbitraire du signe. (Constantin: 2006, 289)

(訳——ものごとは結局、記号の恣意性という根本的な原理にたどりつきます。(ソシュール—影浦・田中：2007, 177))

引用に示されている通り、言語記号の恣意性は、ソシュールの言語思想の「根本的な原理 (le principe fondamental)」である。そして、この概念は、多分に、ロマン・ヤーコブソン (Roman Jakobson) やニコライ・トゥルベツコイ (Nikolai Trubetzkoi) に端を発する、ソシュールを「西欧の構造主義言語学の祖」とする考え方を、決定的に否定するものである。(ここで、我々は、ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) のごとく西欧の構造主義言語学とレナード・ブルームフィールド (Leonard Bloomfield) を中心とするアメリカのそれを混同・同一視する初歩的な過誤を犯してはならない——丸山 (1981, 50) 参照。) 少なくとも、最も充実していると見なされる第3回の「講義」に於いて、ソシュールは言語——詳細に言えばラング——を静的な「構造」と見なしたことは、ただの一度もない。ソシュールがラングを論じる時、「構造」と述べたことは絶無であり、彼のラングの見方は、常に動的なイメージを伴う「システム (système)」であった。ソシュールは、徹して、言語を動的なシステムと見ている。

システムとは何か。唐突な比喩になるが、太陽系 (フランス語で “système solaire”) のごとき、それぞれの星の重力等によって絶妙なシステムを保っている宇宙エリアを考えたい。もしも、その特定の宇宙エリアで、既存の星々が消滅したり新たな星々が誕生した場合、いかなる状態が生じるか。従来の調和が崩れると同時に、新たな絶妙なシステムが招来されるであろう。言語の場合も同様であり、既存の項の消滅・誕生または何らかの変化等は、新たな言語システムを招来する。上掲「覚え書き」からの引用に示されている「新たな普

遍的法則の適応 (nouvelle application des lois universelles)」である。そして、言語に於いては、そうした「新たな普遍的法則の適応」が、個々人の無意識の裡に、個々人の意思とは無関係に(「恣意的」に)時々刻々、次々と、途切れることなく生じている。(言語体系は、常に、個々人の意思を離れて変化する——それは、例えば、上代の日本語から現代の日本語に至る変遷が、途中で何らコミュニケーションに齟齬をもたらすことなく、人々の無意識の裡に進行していた事実を見ても明瞭であろう。西欧に於いて、ラテン語が現代のフランス語・スペイン語・イタリア語等の個別言語に変化・分岐した過程でも、同様の事実が看取されよう。) 今、スリュサレヴァー谷口が触れている「覚え書き」に見られるソシュールの表現に倣って、「敢えて言おう」(à ce que nous osons dire)——ソシュールの言語思想の最重要にして根底的な枢軸の用語を取り出すならば、それは「システム」である、と。

その上で、これまた上掲の「覚え書き」の一文「それ[意識]は常に a/b の相違のみを感知するのであり、これらの項は、いずれも変化にさらされている」は、極めて重要であると見なされる。それは、言語記号の示差性と言語記号の恣意性の関係——つまり、言語記号の示差性が常に個々人の意思とは全く無関係に常に動的に変化しているという様相——を明示する一文と考えられるからである。そして、今、「講義」の全体について、それは、ソシュールがその関係を客観的に明らかにすべく努めた場であったと考えたい。また、その目的のためにこそ、彼は、言語学を通時言語学と共時言語学に分割し、シーニュの概念を提示しそれがシニフィアンとシニフィエで構成されるとする等したのである、と。そして、ランガージュとラングとパロールの観点を導入したのである、と。次章では、この点を念頭に置き、「言語記号の示差性と恣意性の関係」という観点から、今日まで様々に論じられてきたソシュールの用語の内いくつかを、主として、第3回の「講義」の内容を参照しながら再考するものとしたい。

5 言語記号の示差性と恣意性から見たソシュールの言語処理

5.1 通時言語学と共時言語学

先ず、ソシュールが言語学を通時言語学と共時言語学に分割したことについて。そもそも、この2種の言語学は、それぞれに、どのような概念を持つのであろうか。一般に理解されているところでは、前者の通時言語学は言語の歴史的研究に携わる分野とされる。これに対して、後者の共時言語学はそれに対立する概念を持つとされる。そして、ソシュールが言語学をこれらふたつに分割した理由は、新たな学問分野として、後者の共時言語学を確立するためであったとされる。

しかし、はたして、そうなのか。もしもそうであるとすれば、不可解な点がふたつ生じる。ひとつは、共時とは、一体、何物なのか。およそ、いかなる言語にせよ、過去と切り離されて存在はしない。既に述べたように、言語は、個々人の意思とは無関係に、常に変化するものである。だが、万が一にも、一瞬前であれ、過去の言語が「いま現在」の言語と全く異なるものであれば、わずか数分間の会話すら成立しない。したがって、純粋な意味では、通時の持つ概念が歴史的なものに絞られるのであれば、それに対する共時という概念は存在し得ない。ソシュール自身も、その事情は十分に認識しており、第3回の「講義」で、次のように述べている：

En effet la langue est <tout le temps> solidaire du passé, c'est ce qui lui ôte sa liberté, et elle ne le serait pas, si elle n' était pas sociale [...]. La puissance temps vient mettre en échec à chaque instant la puissance qu'on peut appeler arbitraire. <libre choix> Pourquoi dison-nous: homme, chien? Parcequ'on a dit avant nous homme, chien. (Constantin: 2006, 240-241)

(訳——実際、言語は常に過去と連動しており、そのことが言語から自由を奪っているのです [...]。時間の力は、常に、恣意性、選択の自由と呼ぶものの力を妨げます。なぜ *homme* [「人」] や *chien* [「犬」] などと云うのでしょうか？ 前の世代で *homme* や *chien* と言っていたからです。(ソシュール—影浦・田中：2007, 124))

そして、このように、「時間の力が言語の恣意性を妨げる」という認識を持った上で、彼は、次のように、「長い時間の経過が言語記号の変化をもたらす」（趣意）と述べているのである：

< [...] Autre manifestation du facteur temps, ce fait, en apparence contraire au premier:> l'altération des signes quand ils ont à traverser un certain nombre de générations. (Constantin: 2006, 241)

（訳——時間的要因はまた、第一の場合 [上の引用の内容] とは逆のかたちでも現れます。何世代かを経るうちに、記号の変化が起きます。（ソシュール—影浦・田中：2007, 124）

あとひとつ「共時」の語について不可解な点は、ソシュールは第3回の「講義」に限らず、自らの所説の具体例として豊富な言語事実を例示しているが、それらは、ほぼ全面的と言って良いほどに古典ギリシア語やラテン語また古ドイツ語等々からの推移である。

一体、言語が変化するとはいえ、それが「何世代かを経るうち」であれば、比較言語学で熟知されていた事実ではなかったか。また、言語の歴史的研究にしても、それは比較言語学のメインテーマであった。ここで、我々は、ソシュールが述べた通時言語学と共時言語学について、前者が言語の歴史を扱うもの、後者がそれに対立する何らかの対象を扱うもの、という旧来の見方を考え直さねばならないであろう。

すなわち、ソシュールが通時言語学と言う時、それは比較言語学を意識しているのであり、それが、多くの場合、単独の項を実定的と見なしていたことを知らねばならない。これは、「単独の項には何も存在しない」という「覚え書き」以来のソシュールの基本的な見解とは、本質次元に於いて、大いに拮抗する。そこには、言語をシステムと捉える観点に由来する言語記号の示差性は、思い

もよらない事実として完全に払拭されている。一方、言語の歴史的研究にしても、比較言語学では、それぞれがそれぞれから分離独立した項が対象になり、項の相互間の関連性は、およそ顧みられることはなく、やはり、システムの観点から看取される言語記号相互間の恣意性が対象とされることはない。そこで、今や、我々は、おそらく、通時言語学を「システムという観点なき歴史的言語学」、ソシュールが新たに提唱した共時言語学を「システムの観点を導入した言語学（歴史的視点を含む!）」もしくは「システム主義言語学」（構造主義言語学等ではなく）と捉えねばならないであろう。「通時言語学」と「共時言語学」という分割は、まさに、言語記号の示差性と恣意性に即してなされたものと見られるのである。

ソシュールが言語の歴史的变化に言及しつつ言語記号の示差性を講じた例をひとつ挙げておこう。彼は、過去のチェコ語で「女性」の意を表わす *žena* の属格複数形 *ženu* が、現代のチェコ語で変化語尾 *-u* が脱落して *žen* となっているながら、なおかつ属格複数を表示する事実について、「過去に於いて *ženu* が *žena* と異なるので有効であったのと同様に、*žen* は *žena* と異なるので有効」としている。これは、ソシュール学で「シーニュゼロ (*signe zéro*)」と呼ばれる概念に関わるものであるが、ここで、ソシュールは、次のように述べている：

“Il n’y a que des différences; pas le moindre terme positif. (Constantin: 2006, 288)

(訳——差異しかありません。決定的な項などありません。(ソシュール—影浦・田中：2007, 177))。

ソシュールが通時言語学と共時言語学について述べた内容で、次の一節は、広く知られている：

En se plaçant au point de vue du sujet parlant: la suite des faits dans le temps est une chose inexistante. Le sujet parlant est devant un état. De même, le linguiste

doit faire table rase de ce qui est diachronique, de ce qui a produit un état dans le temps pour comprendre cet état lui - même, il ne peut entrer dans la conscience des sujets parlants qu'en adoptant le point de vue de l'ignorance des sources. (Constantin: 2006, 261)

(訳——語る主体の視点に立つとき、時間上の事象の継起というものは存在しません。語る主体は状態を扱っているのです。同様に、言語学者は自身が状態を理解するために、通時的なもの、時間の中で状態をつくりあげるものを、一掃しなければなりません。起源を無視する視点をとることによってのみ、語る主体の意識に入り込むことができます。(ソシュール—影浦・田中：2007, 136))

確かに、ここで「語る主体」(sujets parlants)とされている存在には、日常の言語使用に際して、言語の歴史への意識はないであろう。例えば、英語話者にとって、日常生活の中で、「素晴らしい」等を意味する *nice* が、かつて「愚かしい」の意味を持っていたことへの意識は、通常、ないと考えられる(逐一の単語や語形変化の由来を意識した日常のコミュニケーションは、到底、考えられない)。また、この一節は、ともすると比較言語学等でなされる歴史的研究に言語を人間主体から離れたものとして扱う傾向が見られるのに対して、ソシュールが「人間にとって言語とは何か」を探究しようとしたことを明瞭に物語っている。しかし、システムという観点を考慮に入れなければ、この一節(特に「通時的なもの […] を、一掃しなければならぬ」という部分)は、理解不能となるであろう。

5.2 シーニュとシニフィアン・シニフィエ

これまで、繰り返し「言語記号」という語を用いてきた。これは、ソシュールの用語では「シーニュ」に相当する。そして、このシーニュはシニフィアンとシニフィエから成るとされる。しかし、はたして、ソシュールは、そのよう

なシーニュを実在するものと考えていたのであろうか。高田大介(2000)は、「ソシュールはこのシニフィアンとシニフィエという言葉を持ち出して何を考えようとしていたのか」(49)という疑問を提示した後、「シニフィエとシニフィアンをめぐる記号概念の根拠をたどっていくと、いたる所で時間の倒錯、因果の倒錯に逢着することになってしまう」(62)と結論している。

高田の論考を別にしても、第3回の「講義」の最終日に、ソシュールはシーニュについて、次のように発言した：

Il n'y a pas à proprement parler des signes mais des différences entre les signes.
(Constantin: 2006, 288)

(訳——厳密に言うと、記号[シーニュ]などなく、記号[シーニュ]間の差異しかありません。(ソシュール—影浦・田中：2007, 176))

この発言は、自語撞着の様相を呈している。「シーニュなどなく」という表現はシーニュの不存在を意味しており「シーニュ間の差異しかない」という表現はシーニュの存在を前提としている。ソシュールにとって、一体、シーニュは存在するのか、それとも存在しないのか。以下、この点について、その構成要素とされるシニフィアンとシニフィエとの関係から、一考をめぐらせるものとしたい。

シーニュという用語について、ソシュールは「講義」の早い時期から導入している。しかし、それを構成するとされるシニフィアンとシニフィエの用語は、既述したように、第3回の「講義」の後半で提示された。(それまでシニフィアンに相当する概念は「聴覚イメージ (image acoustique)」等、シニフィエに相当する概念は「概念 (concept)」等とされていた——これは、本節で後に見る第3回の「講義」からの引用との関係で記憶しておきたい)。そして、ソシュールは、「シーニュにおけるシニフィアンとシニフィエの結びつきは恣意的である」とした。

さて、ここで、人口に膾炙しているところでは、シニフィアンは事物の名称または表示手段、シニフィエはそれによって表わされる事物の概念とされている。そのような解釈に基づいて、言語記号の恣意性について、よく次のような説明がなされる——「例えば、青信号が『進め』を意味し赤信号が『止まれ』を意味するのは現状の交通法規に基づく訳であり、何らかの事情で法規が変わるならば、その逆になることもあり得る。つまり、元来、『青信号』と『進め』の意味および『赤信号』と『止まれ』の意味の間には、何ら固定した必然的な（または不変の）つながりがある訳ではない」と。そして、「言葉も同じであり、常に特定のシニフィアンが特定のシニフィエと恒久的に結ばれている訳ではない」という趣旨の説明が付加される。確かに、先ほど例として挙げた英語の語彙 *nice* の意味が「愚かしい」という意味から「素晴らしい」を意味するようになった経緯を見ると、そのような、広く流布しているシーニュに関する解釈は、一応の正当性を持つかのような印象を与える。

しかし、そうした解釈をソシュールの本意と捉えることには、根本的な問題がある。わずかでも、ある一定のレベルに達しているソシュール学を専門とする人々の著述、例えば Carol Sanders (ed.) *The Cambridge Companion to Saussure* (2004) に収録された諸論文等を読むと、ソシュールが徹底した「言語名称録 (nomenclature)」思想の批判者であったことが了解される。これは、言語のいかなる項であれ——よしんば名詞とされている単語（固有名詞を含む）であっても——事物の名称を直接に表示する機能がないことを意味する。すなわち、シニフィアンの否定である。そもそも、ソシュールは、言語単位の存在にすら懐疑的・否定的であり、その事実は、第2回の「講義」の時点で窺われる（日本語文献では、ソシュール著—前田秀樹訳注『ソシュール講義録注解』（1991）・ソシュール著—山内貴美夫訳『ソシュール言語学序説』（1971）等を参照）。言語単位の否定——ならば、ソシュールは、言語記号シーニュの存在すら、実体としては、認めていなかったのか？然り。認めていなかったのである。

何度でも繰り返そう。ソシュールの根本命題は言語の示差性である。我々は、1894年に記されたホイットニー追悼論文のための「覚え書き」で、ソシュール

ルが「言語の終局的法則」として「単独の項には何も存在し得ない」と明言した事実を見た。そして、この思想が第3回の「講義」の最終日に「ラング [後述] には、実定的な項のない差異しかない」という言葉で確認されている事実を見た。加えて、ソシュールの共時言語学の思想を探る際に、彼が現代のチェコ語に語尾変化が失われているゆえに属格複数を示す機能が備わっている例を提示していたことをも見てきた。そう、言語の中に、他から離れて個別の具体的事物を表示する言語記号シーニュは存在しないのである。そして、シーニュが存在しない以上、その構成要素とされるシニフィアンもシニフィエも、シーニュと共に、存在しない。

では、なぜ、ソシュールは、自身が当初から最終に至るまで「終局的法則」とした思想に対立するシーニュを提唱したのであろうか。その理由は、やはり、第3回の「講義」の最終日における次の発言に明瞭であろう——やや長い引用になるが、目下の課題に於いて重要と考えられるので、見ておきたい：

[...] on peut envisager tout le système de la langue comme des différences de sons se combinant avec des différences d'idées. Il n'y a point d'idées positives donnés, et il n'y a point de signes acoustiques déterminés hors de l'idée. Grâce à ce que les différences se conditionnent les unes les autres, nous aurons quelque chose pouvant ressembler à des termes positifs par la mise en regard de telle différence de l'idée avec telle différence du signe. On pourra alors parler de l'opposition des termes et ne pas maintenir qu'il n'y a que des différences <à cause de cet élément positif de la combinaison> (Constantin: 2006, 288-289)

(訳——言語 [パロールに対するラングの意と考えられる] のシステム全体を、音の差異と概念の差異とが結びついたものとみなすことができませぬ。実定的に与えられた概念 [シニフィエと見なされる] などどこにもありませんし、概念と別個に決まった聴覚記号 [シニフィアンと見なされる] もないのです。差異が互いに依存しあうおかげで、ある概念の差異がある

記号の差異とつきあわせることで一見実定的な項に似たものを得ているのです。そのため、項の対立について語る事ができ、そしてそれゆえ、組み合わさった実定的な要素がゆえに、差異しかないなどとは思わないのです。(ソシュール—影浦・田中：2007, 177))

そして、この引用に続いて、次の発言がなされている：

Ce n'est que par la différence des signes qu'il sera possible de leur donner une fonction, une valeur. (Constintin: 2006, 289)

(訳——差異によってしか、記号 [シーニュ] に機能を与えること、価値を与えることはできません。(ソシュール—影浦・田中：2007, 177))

すなわち、ここで述べられている、人間にとって、いわば幻影である「実定的な項に似たもの」こそ、シニフィアンとシニフィエで構成される記号シーニュに他ならないであろう。繰り返すと、シーニュそれ自体は、人間が、コミュニケーションを取る上で実在していると錯覚している仮想現実（幻影）ということになる。ここに、ソシュールがシーニュという用語を導入した真意があると推定される。その上で、敢えてシーニュの形状を想定するとすれば、それは、ソシュールが何度も描いており我々にとって馴染みの深い卵形には譬えられない。それは、ソシュールが仮想現実を描いたものであり、実際のシーニュは特定の概念を他の概念から区別する境界の意義を担う線の形状に譬えられよう。(再び、「ポジティヴ」と「ネガティヴ」の語が互いを前提としてのみ成立していることを想起したい。)そして、そのシーニュには、シニフィアンもシニフィエも、先天的には備わっていない。この場合のシーニュは、おそらく項そのものである——そこでは、チェコ語のzen で見た「シーニュゼロ」も、矛盾した言い方であるが、「無という有」として機能する。この線状の境界線が、——ソシュールは特定の用語を設けていないが——人間の差異を感知する能力(ソ

シュールが別の箇所述べている「連合関係 (rapport associatif)・「連辞関係 (rapport syntagme)」と関係するか?——機会を改めて考えたい」と相俟って、仮想現実 (幻影) である卵型に譬えられるシーニュを形成するのであろう。

ここに至って、本節の始めに取り上げた、一見、自語撞着の感があるソシュールの言葉「シーニュなどなく、シーニュ間の差異しかない」の謎が解けよう。つまり、その言葉は、「シーニュなどなく、シーニュ『と思われている仮想現実——実体はおそらくシニフィアンもシニフィエも伴わない項 (複数)』間の差異のみがある」との意であると解釈される。

結局、筆者には、シニフィアンとシニフィエから成るとされるシーニュは、ソシュールが最終段階で受講生に言語の示差性を理解せしめるために設けた一種の方便ではなかったか、と思われてならない。

5.3 ランゲージュとラング・パロール

以上、言語記号の示差性との関係からシーニュとシニフィアン・シニフィエの意義について一考を試みた。これに対し、ランゲージュとラング・パロールについては、言語記号の恣意性が大きく関わっていると見られる。言語が「ひとつの社会制度」(ソシュールの思想である)であれば、言語における恣意性は、いわば、特定の社会を構成する人々全体の「無意識の合意」が関与していると考えらるべきであろう。

それにしても、今さらながら、ソシュールによるランゲージュとラング・パロールの「発見」は、殊更に驚嘆すべき内容を含んでいる。「発見」とは、これらが人間存在の実相を深く捉えたものと考えられるからである。既に論じた通時言語学と共時言語学ならびにシーニュとシニフィアン・シニフィエについては、かなりの程度に及んで理論装置と見なされ、その点で、「構築」された感がある。しかし、ランゲージュとラング・パロールは、そうではない。諸資料によれば、ソシュールが「ランゲージュ」・「ラング」・「パロール」の用語を提示したのは「通時言語学」・「共時言語学」が提示された後であったとされるが、1894年の「覚え書き」以来、ソシュールを懊悩せしめていた「言語の謎」

の開陳は、或いは、ランゲージュとラング・パロールが発見されることによって、大きく可能性が開かれたのではないだろうか。今日に至る言語学外の分野におけるソシユールの影響も、これらに関係するものが多いように思われる。例えば、現在、文化人類学の分野では、ソシユールの思想の理解はほとんど必須であると言われるが、それは、主としてラングとパロールの関係に由来するとされている模様である。

以上を前置きとして、先ず、ランゲージュとラング・パロールの基本的な概念を確認するならば、始めに、ランゲージュとは、端的に言えば、人間に備わる潜在的な言語習得能力である。「ホモ・ロクエンス (homo loquente)」という言葉があるが、もしも、人間の存在の基底が言語的であるならば、ランゲージュは人間の広大な無意識層の全体に及ぶことになる。ちなみに、É. (エミール・) バンヴェニスト著一岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』(1983, 234-241) には、人間が世界を自身に対する客観的存在と認識し得る淵源として、1人称単数代名詞(日本語の「私」・フランス語の *je*・英語の *I*, 等)の獲得が指摘されているが(それは「個としての自身」でなく世界と自身との分離を表示するか)、そうであれば、ランゲージュは、そこに至るまでの(1人称単数代名詞を獲得するまでの)可能性をも含むことになろう。ソシユールにとって、恐らくはそのような性格を帯びるランゲージュは、次に触れるラングと連動するものであり、彼はランゲージュを基本的にブラックボックスとしながらも、1911年4月28日に講じられた第3回目の「講義」で、次のように述べている：

On peut en outre dire que c'est en choisissant la langue comme centre et point de départ, qu'on a la meilleure plateforme pour aller aux autres éléments du langage [...]. (Constantin: 2006, 218)

(訳——さらに、言語 [ラング] を中心あるいは出発点として選んでおけば、言語活動 [ランゲージュ] に関する他の要素を研究するためにも最良の枠組みとなると言うことができます。(ソシユール—影浦・田中：2007,

91))

この発言は、言語を題材として人間の無意識層全体に対する科学的なアプローチが可能であることを示唆したものと解釈することが可能であろう。少なくとも、ランガージュの「見出(いだ)し」は、ソシュールの言語研究を、人間の全的な存在の究明との関係から大いに意義あらしめたものと見ることができ、それ(ソシュールの言語研究)が後に言語学外の様々な分野に影響をもたらしたのも、この点に於いて頷けるのではなからうか。

次に、ラングは、母語・第二言語等を問わず、習得された言語である。仮に、ランガージュを海洋に譬えるならば、「一応は」との但し書きを付けた上で、ラングを氷山に譬えることもできよう——その類いの譬えもあると聞く。ただし、ラングは静的な構造体ではなく、常にシステムティックに変動してやまない動的活動体であり、この点からすれば、「海洋—氷山」の譬えは、適切とはいえない。そして、ラングは特定の社会に共有の存在であり、それと同時に、その社会を構成するコミュニケーション能力を持ったひとりひとりの頭脳に形成されている。そうでなければ、どうして特定の社会におけるコミュニケーションが可能になるうか。ただし、ソシュールは、ラングの定義に際して、文字を含む一切の表記および現代であればオシログラフやスペクトログラフに反映されるであろう一切の言語音をも「ラングと全く関わりがない非言語的なもの」として徹底的に排除している。ラングとは、あくまでも、「特定の社会を構成する人々の頭脳に共通して存在するもの」——この段階で留められねばならない。しかし、これは重ねての確認になるが、ラングは静的な性格のものではなく、きわめて動的な存在である。そして、パロールについては、再び「一応は」との但し書きのもとに「ラングの運用すなわち言語使用の実践」とすることができる。言語使用の実践である以上、パロールには、全面的に言語音が、そして、文字を持つ社会であれば識字率の度合いに従って文字の表記が伴う。ソシュール自身が述べている譬えによれば、ラングは楽譜に相当し、パロールは楽譜の演奏に相当する——もっとも、その譬えに即して言えば、この「楽譜」

は、時間の経過と共に、常に変動してやまないものであるが。

さて、ここで認識を新たにしておきたい。およそ、ありとあらゆる言語は、ひとつのシステムから次のシステムへと、徐々に変化してやまない。英語のように言語を異にする民族との度重なる攻防と融和を通して劇的に変化する言語もあり、アイスランド語のように変化が極めて緩慢な言語もある。しかし、いずれにせよ、人間どうしが関わる言語であれば、変化を免れるものはない。(ソシュールによれば、エスペラント語のような人工言語であれ、それが広範囲で多くの人々によって使用されるに至るならば、変化を免れないとされる——今日までの印欧語の変遷を見れば、極めて当然の推測であろう。) 換言すれば、我々の意識をよそに、ラングは常に変動している。言わずもがな、いずれの個別言語であれ、一般に「文法」と呼ばれるものは、何ら不変の「法」(法規・規則)ではなく、常に不安定な状態にある。そして、その変動は個々人の意識と関わりがなく、そこに一定の法則性もない——すなわち、この変動は、言語に於いて(人間の側に於いて、ではなく)恣意的な様相を呈している。

(念のため、ここで問題にしているのは、例えば日本語で漢字使用が規制される等による言語の変化は、断然、無関係であり、あくまで言語体系の変化である。ことは統語・語形成や語の意味変化による他の語との関係の変化等に関わる。すなわち、やはり日本語で言うならば、誰ひとり古典に見られる否定命令形「な—そ」を禁じた人はなく、仮にいたとしても、それに一般の人々が従った事実がない状況の中、この形態は消滅して別の対応する形態に変化した——そのような事情との関わりである。ついでながら、英語で言えば、元来、現代英語の助動詞 *may* (古英語 *magan*) は「可能」、*must* (古英語 *motan*) は「許可」の意を表示していたが、やがて *must* が「義務」の意を表示するようになり、これに伴って「可能」を表示していた *may* が「許可」を表示するようになり、新たに「可能」を表示する助動詞として、それまで一般動詞として「知る」の意味を担っていた古英語の *cunnan* が *know* と *can* に分岐して後者が適用された。このような語と意味関係のスライドと語の分岐に見られる体系上の変化に於いて、想定される法則はなく、かつまた個々人の意思をも離れている。)

では、一体、何がラングにおけるシステマティックな変化をもたらすのであろうか。その解答は、パロールである。パロールが言語実践である以上、原則として、それがラングに支配されることは当然である。しかし、もしも、仮に「絶対的にそうである」とすれば、決して、言語の変化は生じ得ないであろう。パロールについて、ソシュールは、第3回の「講義」で述べている：

Le rudiment de tout changement dans la langue n'y arrive que par la parole. Tout espèce de changement est essayé par un certain nombre d'individus. <(des ballons d'essai)> Ils ne seront faits linguistiques que quand ils seront devenus acceptés par la collectivité. (Constantin: 2006, 270)

(訳——言語の中のどんな変化も、まずは、発話 [パロール] を通じて導入されます。あらゆる種類の変化が一定数の個人により試されます (変化の様子見)。変化は、集団に認められたときに限って、言語的な事実になります。(ソシュール—影浦・田中：2007, 149))

実に、ラングとパロールは相互関係にある (先に、パロールについて『「一応は」との但し書きのもとに『ラングの運用すなわち言語使用の実践』とすることができる』と述べたゆえんである)。この間の事情について、第3回の「講義」では、次のように発言されている。

Il n'y a rien dans la langue qui n'y soit entré <directement ou indirectement> par la parole c'est-à-dire par la somme des paroles perçues, et réciproquement il n'y a de parole possible que lors de l'élaboration du produit qui s'appelle la langue et qui fournit à l'individu les éléments dont il peut composer sa parole. (Constantin: 2006, 236)

(訳——言語 [ラング] には、すべて、直接あるいは間接に、発話 [パロー

ル], つまり認識できる個々の発話 [パロール] の全体から得られたものしかありません。また逆に, 言語 [ラング] と呼ばれる産物なくして発話 [パロール] は考えられず, 言語 [ラング] は発話 [パロール] を作り出すためのさまざまな要素を個々人に与えます。(ソシユール—影浦・田中: 2007, 116))

ソシユール学者の間では, 一般に, ソシユールはラングを主たる研究対象としたとされている。しかし, 上掲の発言と共に, 第3回の「講義」に様々な古典言語から現代の諸言語への変遷が例示されている事情を考慮にいと, ソシユールは, 実際は, ラングとパロールの関係をこそ主な対象としたのではなからうか。

補足として, パロールがラングに変更をもたらす「集団が認め」得るものひとつに, ソシユールが「類推 (analogie)」と名付けた現象が考えられる。これは第3回の「講義」では触れられず, 第1回・第2回の講義における内容に含まれているものであるが, 第2回の「講義」(ソシユール—前田: 1991, 166-167) では, フランス語でかつて存在しなかった *entamable* (「手を出せる」) という新語がもたらされた原因として, 次のような比例式が示されている: 「*aimer* : *aimable* = *entamer* : X」。この比例式が意味するところは, 既存の *aimer* (「愛する」) と *aimable* (「愛せる」) の対比から *entamer* の *-er* が *-able* に変えられて *entamable* がもたらされた, という経緯である (X は *entamable*)。こうした経緯をソシユールは「類推」とし, それを言語上の「創造 (création)」と位置付けた。

他にも, おそらく過誤によるもの等によってパロールがラングの体系に影響をもたらす場合が考えられよう。

いずれにしても, こうした現象は, ランゲージュの潜在的可能性によってパロールがラングに及ぼす効果と見なされる。そして, ラングが動的なシステムであれば, その一部に変更がもたらされると, 自然, 全体に関わる影響が及ぼされる。ここに, 言語記号の恣意性によってラングのシステムに変化が生じる

経緯を認めることができよう。

本節の初めに触れたように、ランゲージとラング・パロールは、人間存在の実相に関わる卓抜した発見と見なされ、少なくとも、これに類するものは、ソシュールまでの言語学、特に比較言語学では、(たとえ言語と文化史の関係は考慮されていたにせよ)一切、意識されていなかった。この点、ソシュールは、自らの言語研究にランゲージとラング・パロールを導入することにより、言語を人間存在との関係で扱うことを可能ならしめたと言えるのではないだろうか。

6 結語

「わが終わりにわが初めあり (In my end is my beginning)」とは、アメリカイギリスの詩人 T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot) の言葉である。それ自体は、いかようにも解釈できる言葉であるが、ソシュールの場合、「覚え書き」に窺われる 1894 年頃から自身を桎梏し懊悩せしめた言語記号の示差性と恣意性は、その本質を変えることなく 1911 年 7 月 4 日に行なわれた第 3 回「講義」の最終日まで論理的に客観化された。その間の 17 年、彼は、日々、理論構築の呻吟にあえいだものと推察される。また、思念は思念を呼び、幾度も複雑な思考の隘路をたどったであろうことも十分に推察される。この点については、本稿では触れなかった、ソシュールが最終的に放擲するに至った数多くの創出された用語や比喻に窺われる (それらは、ソシュールの思考の推移を知る上で、きわめて貴重であり、ハリス (Harris) (2003) が良き参考書となる)。そして、彼の懊悩は、ランゲージとラング・パロールという人間存在の在り方と言語の関係に眼を開かしたと考えられる。

本稿の最後に、現在のソシュール評価に関する若干のコメントを付記しておきたい。

今日、時に「ソシュールの言語理論は没後に完成された」或いは「ソシュールの時代は終わっている」という言葉が聞かれる。前者は主にルイス・イェルムスレウ (Louis Hjelmslev) の存在、後者は主にチョムスキーの存在を意識し

ての言葉であろう。これらについて、大胆な言い方になるが、いずれも、ソシュールが理論言語学者というよりも、根本的にフィロロジスト (philologist) であった、という視点が欠落しているように思われる。言うまでもなく、フィロロジストと理論言語学を同一視することはできない。

イェルムスレウにしてもチョムスキーにしても、理論言語学者である (この見方に、おそらく反論はないであろう)。その一方、ソシュールは、彼が卓抜した功績を挙げた比較言語学の分野に於いて、他の追従を許さないほどに様々な古典言語および当時における現代諸言語を習得し、あくまでも終始一貫して、それらの言語事実に即して論理を展開したのであった。(1894年頃に始まるソシュールの懊悩も、その言語事実に由来するものではなかったか。) イェルムスレウとチョムスキーがソシュールに匹敵するほど古典言語に通暁していたという話は聞かない (彼らが理論言語学を専門とする人々であれば、それも自然であろう)。恐らくは、ソシュールを理論言語学者の枠組みに閉ざす背景には、本稿で見た「共時言語学」の用語に関する誤解が関わっている。

加えて、言語学の分野で「ソシュールの時代の終焉」を告げる人々は、そのような言葉によって「構造主義言語学の終焉」を意図している場合があろう。しかし、ソシュールは、言ってみれば、終局、「(言語史に看取される諸々の言語事実に考慮を入れた) システム主義言語学」の人であり、構造主義言語学者ではない。この点では、ソシュールの言語思想は、未だ言語学の分野で手つかずの状態にあると言えるかもしれない。

また、筆者の寡聞のゆえか、イェルムスレウやチョムスキーの理論が、ソシュールのそれほどに言語学外の分野で広範にして甚大な影響をもたらしたという話は聞かない。ことによると、ソシュールの思想の意義に最も疎いのは、言語学を専門とする人々かもしれない。

参考文献

欧文献

- Constantin, Emile, "Linguistique générale, Cours de M. le Professeur de Saussure, 1910-1911" in *Cahier Ferdinand de Saussure: Revue suisse de linguistique générale* 58, Genève: Librairie Droz, 2005, 83-289.
- Harris, Roy, *Reading Saussure: A critical commentary on the 'Cours de linguistique générale'*, London: Gerald Duckworth & Co., 1987.
- , *Language, Saussure and Wittgenstein: How to Play Games with Words* (paperback edition), New York: Routledge, 1990.
- and Talbot J. Taylor, *Landmarks in Linguistic Thought I: The Western Tradition from Socrates to Saussure* (2nd edition), New York: Routledge, 1997.
- , *Saussure and His Interpreters* (2nd edition), Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003.
- Joseph, John E., Niget Love and Talbot J. Taylor, *Landmarks in Linguistic Thought II: The Western Tradition in the Twentieth Century*, New York: Routledge, 2001.
- Sanders, Carol (ed.), *The Cambridge Companion to Saussure*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- Saussure, Ferdinand de (translated from French into English with an introduction and notes by Wade Baskin), *Course in General Linguistics*, New York: McGraw-hill Paperbacks, 1966.
- *Cours de linguistique générale* (édition critique par Rudolf Engler) Tome 1, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1968.
- (publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger), *Cours de linguistique générale* (études et documents Payot), Paris: Payot, 1968.
- (translated from French into English and annotated by Roy Harris), *Course in General Linguistics*, London: Gerald Duckworth & Co., 1983.
- (texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler avec la collaboration d'Antoinette Weil), *Écrits de linguistique générale* (bibliothèque de philosophie), Paris: Édition Gallimard, 2002.
- (translated from French into English by Carol Sanders and Matthew Pires with the assistance of Peter Figueroa, introduced by Carol Sanders), *Writings in General Linguistics* (French text edited by Simon Bouquet and Rudolf Engler with the assistance of Antoinette Weil), Clarendon: Oxford University Press, 2006.

邦文文献

- 加賀野井秀一, 『知の教科書 ソシユール』(講談社選書メチエ300), 東京: 講談社, 2004.
- カラー, ジョナサン(著) / 川本重雄(訳), 『ソシユール』(岩波現代文庫, 学術84), 東京: 岩波書店, 2002.
- スタロパンスキー, ジャン(著) / 金澤忠信(訳), 『ソシユールのアナグラム』, 東京: 水声社, 2006.
- スリュサレヴァ, H.A.(著) / 谷口勇(訳), 『現代言語学とソシユール理論』(改訂版), 東京: 而立書房, 1989.
- ソシユール, フェルディナン・ド(著) / 前田英樹(訳・注), 『ソシユール講義録注解』(叢書・ウニベルシタス345), 東京: 法政大学出版局, 1991.
- (著) / 影浦峽・田中久美子(訳), 『ソシユール一般言語学講義——コンスタンタンのノート——』, 東京: 東京大学出版会, 2007.
- Saussure, F. de(著) / 山内貴美夫(訳), 『ソシユール 言語学序説』(新装版), 東京: 勁草書房, 1984.
- 高田大介, 「シニフィアンとシニフィエ: 記号概念の根拠」, 『フランス文学語学研究』(早稲田大学大学院文学研究科フランス文学専攻研究誌) 第19号, 2000, 49-64.
- 立川健二, 『<<力>>の思想家ソシユール』(叢書記号学的実践7), 東京: 水声社, 1986.
- ・山田広昭, 『現代言語論——ソシユール フロイト ウィトゲンシュタイン——』(ワードマップ), 東京: 新曜社, 1990.
- バンヴェニスト, É(著) / 岸本通夫(監訳) 『一般言語学の諸問題』, 東京: みすず書房, 1983.
- マウロ, トゥリオ・デ(著) / 山内貴美夫(訳), 『ソシユール一般言語学講義』校注』, 東京: 而立書房, 1976.
- 前田英樹, 『沈黙するソシユール』, 東京: 書肆山田, 1989.
- 丸山圭三郎, 『ソシユールの思想』, 東京: 岩波書店, 1981.
- , 『ソシユールを読む』(岩波セミナーブックス2), 東京: 岩波書店, 1983.
- (編), 『ソシユール小辞典』, 東京: 大修館, 1985.